

「現地を訪問して想うこと」

2005年産業社会学部卒業 飯田 勇一

私は11月5日、6日に2016年度立命館大学校友会東日本大震災復興支援事業東北応援ツアーの岩手県コースに参加させていただきました。

ツアーの中で印象深かったことの内の2つについて述べます。

1つは震災学習列車（三陸鉄道南リアス線）です。

この列車は釜石駅から盛駅までの約1時間、震災を体験した鉄道会社の社員の方が車内で当時の様子を振り返りながら説明してくださる、というものです。特に印象深い言葉は「震災を風化させたくない。（被災地の住民としては）自分たちのことを忘れてしまったのではないかという不安がある。」「被災地の住民は震災学習列車が走ると、通常運行の列車とは違うことがわかる。こうやって来てくれることが嬉しい。」というものでした。また、調度、私達が釜石駅前乗車を待っている時に防災無線のような音で、耳にしたことがないサイレンが鳴りました。岩手県校友会の方に聞くと「どうやら11月5日は「津波の日」のため、訓練で鳴っているのだろう。」のことでした。「当時はこの辺りにも津波が押し寄せ、あそこに見える工場の塀まで水に浸り、塀を登った人がいる。」というお話を伺い、津波の恐ろしさを改めて想像しました。

もう1つ印象に残っていることは、宿泊したホテル内勉強会で体験談を伺えたことです。幸いにも役所の機能は津波被害から免れた大船渡市の職員の方がおっしゃっていた「入ってくる情報といえば〇〇地区『壊滅』。という『壊滅』という言葉の連続であった。」というお話を聞き、思い出したり、話すのも苦しいだろう当時の凄惨な状況を想像しつつ感謝の気持ちが湧いてきました。また、別の職員の方は「職員の中には被災した市民から『あんたたち被災者にもなれなかったね。』と言われた人もいます。」とおっしゃっていました。子どもや高齢者の方は被災者として取り上げられることが多いように思いますが、被災地には家族の安否がわからなかったり、自分のことなど二の次で飲まず食わずで活動したり、家や家族や大切な人を失った中で仕事を全うされた方々がいるという事実について考えさせられました。

このように、震災から5年を過ぎた今、震災について改めてもう一度立ち止まって考える機会をいただき、大変貴重で有意義な2日間でした。校友会事務局の方々や岩手県校友会の皆様等企画に携わった方々に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。